

# イギリスの保育から学ぶこと マデリー幼児学校の探究

佐藤寛子

(幼稚園教諭)

3月の中旬、イギリスの幼児学校を訪れた。三つの公立幼児学校を参観したが、ここでは、お茶の水女子大学と交流を重ねているマデリー幼児学校（本誌2019年春号にて紹介）での子どもたちの様子を紹介し、保育者たちの探究的な取り組みについて報告したい。

## マデリー幼児学校の一日

マデリー幼児学校は、イギリスの工業都市バーミンガムから電車と車で小一時間のテルフォードという町にある。近くには世界遺産に登録されているアイアンブリッジ渓谷があり、周辺は緑豊かな閑静な住宅街だ。イタリ

アのレッジョ・エミリア幼児学校の取り組みに触発されつつも、自校の子どもたちの生活や育ちに即した実践、地域とつながる幼児教育の在り方を探究している幼児学校のひとつである。

イギリスは、5歳児から義務教育であり、4歳児9月より小学校準備期間となり、レセプションクラスに所属する。そのため、マデリー幼児学校に在籍する子どもたちは、2〜3歳児が中心である。昼食前に帰宅する午前部の部と、昼食後に登校してくる午後部の部と2部制になっている。

登校後、ひと遊びしてから、室内に集まり、



グループ活動が始まる。子どもたちは、約10名ずつの縦割りの4グループのどこかに所属し、グループごとにテーマの違うプロジェクトに取り組む。プロジェクトの内容は、いずれもトの内容は、いずれも子どもの思いや生活の流れの中で見いだされたものであり、長く続くものもあれば、短い期間で終わるものもあるようだ。グループでの活動は、たっぷり時間をとって行われるが、一段落したら三々五々自由に遊び始めるなど、その取り組み方は緩やかであった。グループには、二人の保育者がつき、主にリーダー的にかかわる人と、写真や記録もとりながら子どもに補佐的にかかわる人と、それぞれに役割が決まっていた。グループでの活動後、子どもたちは自由に遊び、保護者が迎えに来て下校となる。

午前の部も午後の部も、子どもたちが帰った後、グループ担当の保育者が、対話形式でその日の保育を短時間で振り返り、そこで話題になったことを記録として残していた。

### 「アマリリス」のプロジェクト

愛嬌たっぷりで栗色の巻毛がかわいらしいP（2歳児）と、祖母と登校し、集団からやや外れがちなG（3歳児）が気になり、彼らの所属するグループを観察することにした。このグループは、「STUDIO」と呼ばれる部屋に集い、アマリリスのプロジェクトに取り組んでいた。

アマリリスのプロジェクトは、このグループのある女児が、家からアマリリスの球根を幼児学校に持ってきたことから始まったようだ。球根の形の面白さ、どんな花が咲くのだろうとイメージを膨らませ期待する気持ち、見事な花を咲かせたうれしさ、その色の美しさなど、子どもたちが興味をもち、気づいた

り発見したりしたことから、プロジェクトが続いていることがうかがえた。

部屋の机には、アマリリスの花、虫メガネや物差し、色鉛筆などの道具類が置かれ、窓際には、イーゼルに大きな紙が張っており、中央にアマリリスの写真が飾られ、何色かの絵の具と絵筆が用意されていた。

まず保育者は、部屋に集まった子どもたちに、スケッチブックに描かれた写真付きの記録を見せながら、これまでのプロジェクトの流れを確認した。その後、子どもたちは思い思いに動き始めた。

P（2歳児）は保育者と一緒に椅子に腰掛け、机上のアマリリスを見たり、傍らの女兒が紙に描き始めるのをまねたりしていた。しばらくすると、絵筆を動かしている別の男児に気づき、窓際に移動して、自分も絵の具で描き始めた。絵の具を含ませた絵筆が、それほど力を入れなくてもスーッと伸びていく感じが面白いのか、絵筆を滑らせ、何本も線を



描いたり、勢い余って自分の手に付いた絵の具をじっと見たりしている。そのうち、歌うように声を出しながら描いている隣の男児と気が合い、顔を見合わせて笑ったり、一緒に声を出したりしながら描くようになり、楽しんでいることが伝わってきた。

一方、G（3歳児）は、今一つこの活動に乗れないようだった。保育者に誘われると、とりあえずやってみるものの、長くは続かず、やがてフラフラと外に出て行つては、しばらくしてから、一人で、あるいは保育者と一緒に戻ってくるのを何度も繰り返していた。参観者である私たちにも、「一緒にお庭に行かない？ いいものを見せてあげるよ！」と何度も誘いに来てくれた。

この日、実は、Gの大好きな保育者がお休

みだったことが後からわかった。送迎の祖母には素直に甘えている姿が見られたが、今のGにとっては、自分の思いや存在を受けとめてくれる人との出会いやかかわりが一番大事なプロジェクトなのかもしれない。

2〜3歳児にアマリスのプロジェクトはやや難しい印象を受けた。それでも保育者の働き掛けで、子どもたちの中には、アマリスのようなものを描きながら、物語をつくり始める人があったり、Pのように絵の具の面白さに夢中になる人があったりと、興味を広げていく姿が見られた。

### プロジェクト実践から学ぶこと

自分という世界をやつと意識し始めた2歳、3歳の子どもたちが、いろいろな角度から取り組める工夫はなされていたとしても、果たして与えられたプロジェクトにどれくらい自分事としてかかわれるのかと考えると、難しさを感じる。また、自分の思いから動き始め

た子どもたちの生活を、時間的にも空間的にもやや区切ってしまう印象のあるプロジェクト実践は、子どもの主体的な生活を大切にしたいと考えてきた私たちの園では、なじまないありようだとも感じた。

しかし、校長のルイズ先生は、子どもとモノ、子ども同士、子どもと保育者との関係性の構築を重視され、関係性の中での個々の育ちを捉えていこうとされており、その考えには感銘を受けた。プロジェクト実践はその試みであり、プロジェクトの質を吟味していくことの必要性も同時に説かれていた。保育者たちの保育後の豊かな対話の時間、保育者のまなざしの感じられるたくさんの写真記録や手描きの実践記録の活かし方など、数々の試みを重ねていることが感じられ、多くの刺激を受けた。マデリー幼稚園学校の、他国の実践からその哲学を学び、自校の課題を意識に置いた上で、探究的に取り組んでいく姿勢からは学ぶことが多かった。